（第２号様式）（用紙日本工業規格Ａ３横長型）

神奈川県教育委員会教育長　殿

提出日：令 和 5 年 3 月 16 日

学校名：県立横浜ひなたやま支援学校

令和４年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取　組　の　内　容		校　内　評　価		学校関係者評価 （２月 21 日実施）	総合評価（３月９日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程・学習指導	生徒一人ひとりが自立と社会参加に向けた学習内容や指導方法の充実を図る。 成人年齢や選挙権年齢の引き下げに対応した教育を実施する。	①主体的、対話的で深い学びを推進する。授業のアイデアの共有と活用を進め、組織的な授業改善を図る。 ②成人年齢、選挙権年齢引き下げに伴い、学年に応じた系統的、本質的な指導を実践し、指導の共有化を図る。	①主体的、対話的で深い学びのチェックシートの活用を推進する。教科会で情報を共有し、学年のつながりのある年間指導計画を作成し、教科ごとにまとめる。 ②学年や学習状況に応じて、系統的、本質的な指導の充実を図り、指導案や教材の共有化を図っていく。	①主体的、対話的で深い学びのチェックシートを活用し、具体的な視点を授業案に明記することができたか。3年間のつながりを意識した年間指導計画が作成できたか。 ②自己選択・自己決定の場面を日常生活等で設定できたか。また、「授業の宝箱」内を整理、共有化できたか。	①初任者研究授業でAL（アクティブラーニング）チェックシートの活用を徹底した。教科会やチーフ会で3年間のつながりを意識した年間指導計画を確認した。 ②7月模擬投票、3月生徒会役員選挙（選挙体験学習）を実施した。日常生活等では、自己選択・自己決定の場面を設定できた。	①授業の評価をし、次に活かせるような仕組みを作る。年間指導計画を周知し、どのような授業を行ったか振り返りを行い、次年度の計画に活かす。 ②日常生活等で自己選択・自己決定できる場面を増やしていく。引き続き、成人年齢、選挙年齢引き下げに係る授業案の整理を進めていく。	**【アンケート】**（とても良い、だいたい良いの合計） **保護者 86.1%(9.7↗)、** **生徒 82.4%(6.5↘)** ＊（　）は前年比 ・教育の計画と方向性の周知と、記録と評価の両方が大切。毎日、少しずつ記録をためることで、客観的な評価が得られる。 ・コロナ禍なので仕方がないとは思うが、もう少し普段の様子を見られたらよいと思う。 ・これまで定期テスト等にチャレンジする経験がなかったが、清掃技能検定で褒められ自信につながった。色々な機会で指摘を受けて成長してほしい。	①チェックシートを活用し、研究授業等で授業改善を実施したが、全ての生徒にとって、わかりやすい授業展開がなされているかは、検討の余地がある。 　また、教科会の役割を明確にし、年間指導計画の系統性について確認をしたが、実際の授業につなげ、効果的に活用するまでには至っていない。 ②実践的場面として模擬投票、生徒会役員選挙を実施した。自己選択・自己決定の経験を積み重ねることで、生徒の自信につなげることが出来た。	①評価の観点を明確にし、授業改善につながる学習指導案の検討を計画的に実施する。また、授業場面を保護者や地域の方々に公開することで、客観的な評価をいただき、教職員個々の授業改善につなげ、指導力を向上させる。 　教科会を活性化し、より系統性を意識した3年間の年間指導計画の書式や活用方法を検討していく。 ②日常生活や様々な教育活動の場面で、自己選択・自己決定ができる機会を増やすと共に、系統的な政治参加教育の実践に向け整理していく。
2	生徒指導・支援	生徒の個々の実態を的確に把握し、生きる力となるような指導や支援を行う。 社会生活に必要な、他者との協調・思いやり、規範・モラルの意識を育む指導を充実させる。	①アセスメントやキャリアパスポート等、生徒一人ひとりの実態を客観的に把握し、ニーズに応じた授業を実践する。 ②コミュニケーション力を高め、互いの良さを認め合い、学び合える取組を推進する。	①個別教育計画作成の手引きをもとに研修を実施し、新しい書式の活用を推進する。また、職員アンケートを行い、さらなる改善につなげる。 ②相談と連携して教職員研修を行う。SSE「ライフスキルチェックシート」の活用を通じて、生徒同士がコミュニケーションを図れる活動を設定し、自己理解や他者理解を深め、人間関係づくりの基礎をつくる。	①個別教育計画に、ニーズに応じた目標設定と手立てが記載されているか。また、職員アンケートをもとに、さらなる改善ができたか。 ②教職員研修を行うことができたか。1年生で「ライフスキルチェックシート」を使用し、年度当初と年度末に評価できたか。	①職員アンケートを行った結果、特に意見は出なかったが、生徒の実態を最初に表す新書式をグループ会や学年会で提案している。 ②1学期中に相談と連携し SSE「ライフスキルチェックシート」の教員研修を行った。	①1 年生の個別教育計画作成時期の見直しや、実態の記載、書きやすく読みやすく、活用しやすい書式の検討を行い、活用につなげていく。 ②年度末の 2 月と4月当初の評価の比較検討を行い、来年度への目標に活かす。	**【アンケート】**（とても良い、だいたい良いの合計） **保護者 81.2%(3.7↗)、** **生徒 70.6%(0.9↘)** ・高校生としての年齢相応の活動や生徒の特性を理解した指導等、再確認してほしい。 ・同世代、生徒同士のコミュケーションの取り方について、個別教育計画で課題とし、学校で力をつけてもらえることはありがたい。 ・実習を受け入れる側として、挨拶や質問の答え方はしっかり出来るが、先輩社員等との会話や言葉遣いの練習が必要と感じる。	①個別教育計画に関わる評価は比較的高いが、アンケートには「特性を理解した指導」を望む意見があり、さらに的確な生徒の実態把握が必要である。 ②コミュニケーション力を高めるために、SSE「ライフスキルチェックシート」の教職員研修を行い、1 年生に実施した。評価結果を今後の指導にどう反映させるか、具体的な活用法について、さらに検討していく必要がある。 　生徒の実態として、大人とのコミュケーションは出来ても、同年代同士では難しい面がみられる。	①今後も生徒の実態を正確に把握し、より読みやすく活用しやすい書式の改善に取り組む。 ②生徒が自己理解、他者理解を深め、自己有用感や他者への共感性等を身に付けるために、今後もSSE「ライフスキルチェックシート」を正しく活用するための教職員研修を実施し、生徒の支援に活かす。 　特に同世代間のコミュケーション力の向上をめざし、日常生活において、生徒同士がコミュケーションを図れる活動を意図的に設定する。
3	進路指導・支援	生徒が納得できる進路選択を実現できるように、生徒の実態と思いを反映した指導、支援を行う。	①在学中に身に付けておきたい力（特に日常生活面に関わる課題）を実習場面や日常生活の中で生徒自身が意識して改善することができるような支援を行う。 ②進路状況や在学中に身に付けておきたい力等の情報提供を保護者へも行い、理解を深めることで、離職率の低	①教職員間で「就労準備性ピラミッド」や「ライフスキルチェックシート」等を活用した指導について共通理解を図り、実践するための研修会を実施する。生徒にアンケート等を実施し、実践の効果を測定する。 ②生徒自身の課題を担任と保護者で共有し、具体的な取組方法を提案する。 よこひな通信や進路説	①生徒自身が課題を意識した取組につながる、効果的な支援方法の検討や実践を行うことができたか。 ②家庭と学校が連携した進路支援を行うことができたか。 保護者の理解を深められるような、定期的な	①様々な授業でのメモに関する学習を行った。作業学習では作業種によってメモの活用状況に差はあるが、生徒が自発的にメモを見返し、振り返りをする様子も増えてきた。また、作業日誌を新書式に変更したことで、メモを基に自身の課題や目標を整理し記入できるようになった。 ②進路面談等を通して、課題と取組方法について家庭と学校とで共有することができた。A型事業所の見学会の開催や	①教職員間での進路指導に関する共通理解を引き続き深める。メモの活用のように、一部の教科だけでなく、教科等横断的な取組としてできる進路指導を検討し、学部と協力しながら進めることが今後の課題である。 ②生徒一人ひとりの課題や具体的な支援方法について関係者の中で密に共有し、進路支援を行う。保護者のニーズを探る方法	**【アンケート】**（とても良い、だいたい良いの合計） **保護者 85.6%(18.3↗)、** **生徒 74.2%(3.9↗)** ・メモをとる習慣がある人ない人の差は歴然とある。メモの取り方やまとめ方、色をつけるなどの工夫をすることが大切。 ・日常生活の中や実習中でのやりとりが外部実習に出た際に成果として出る、活かされると感じた。 ・コロナ禍と重なり会社見学なども制限があり、鮮度感のある情報を得るには厳しい状況だった。 ・1年のうちに特例子会社	①生徒自身が課題を意識できる取組として、作業学習や教科等の授業において、メモの活用を取り入れ、少しずつ成果が表れてきている。 ②進路面談や進路説明会等を通じて保護者のニーズを伺い、よこひな通信を活用した情報発信や、保護者見学会の運営に活かすことができた。 　情報提供については、前年度より評価は上がっているが、アンケートには「よりタイムリーで豊富な進路情報の提供」が求められている。	①生徒にとってメモを取る必要性やその効果が感じられるような授業展開を工夫し、継続して実践する。 　メモの活用のような教科等横断的な取組を検討し、3年間を通じた系統的な進路学習を進める。 ②引き続き、家庭と学校の連携を深め、保護者のニーズを的確に捉えると共に、ホームページの活用など、よりわかりやすくタイムリーな情報発信の場を開拓していく。

			下を図る。	明会等を利用し、事業所の紹介や保護者のニーズに応じた情報を定期的に発信していく。	情報発信を行うことができたか。	よこひな通信を活用する等、保護者のニーズに即した情報発信の場を設けることができた。	を検討するとともに、情報発信の場を増やし、わかりやすい進路支援を目指す。	が集まる説明会に参加できていれば、もっと意識が変わって早く取り組めたのにと残念な気持ちである。		
4	地域等との協働	地域と連携し、教育活動や防災体制の充実を図る。	①地域との連携による教育活動を通して自己肯定感につなげる。	①昨年度より地域と交流する機会を増やし、販売等の役割分担により自己有用感を養う。 利用者へアンケート調査を実施し、生徒の振り返りに生かす。	①自己評価やアンケート結果等を生かした振り返りを行い、自己有用感を養うことができたか。	①2月には地域の地区センターでの販売に有志の生徒が参加した。また、月1～2回程度のフードサービスユニットを中心とした地域向けの販売活動の中で、利用者に「接客態度について」のアンケートに回答してもらった。高評価を多く得られたことで、次の活動への意欲や自己肯定感、自己有用感を高めることができた。	①コロナ禍で自粛していた活動の再開や、体験を通して自己有用感や仕事に対する意欲等を育てるような新たな活動を検討していく。地域と連携し、生徒の活躍の場を拡げられるような活動を計画していく。	**【アンケート】**(とても良い、だいたい良いの合計) **保護者 48.3%(15.3↗)、生徒 78.3%(1.5↗)** ・コロナで行事等ができていなかったが、遠足や修学旅行等や地域へのパン販売等も再開でき、とてもよかったと思う。 ・パン販売は、資料が配付されるので、地域の人は参加している。コロナが明ければ、状況も変わってくると思う。 ・コミュニケーションを図りながら、色々な経験を積み重ねることが大切。学校だけでなく、色々な場面で少しずつでも続けられるとよい。 ・アンケートの設問が学校内での事柄が多く、保護者が把握しにくい案件になっている。わからないから、「どちらとも言えない」を選んでしまう。	①今年度は主にパン販売を通じて、これまで自粛していた地域との交流を再開した。高校との交流や事業所との協働など、活動の場を広げ、生徒は自己有用感や自己肯定感を得ることが出来た。 生徒は、下瀬谷消防署と連携した防災訓練について「役に立った」と評価をしている割合が高い。 教職員は、地域と連携した防災訓練や職員HUG研修について「有意義であった」と、高い評価をしている。一方、保護者からは、地域と連携した様々な活動内容が、保護者まで伝わってこないため、取組が正しく評価できないとの意見もいただいた。 地域の方からは、生徒の防災教育について「声をかけていただければ、御協力します」との意見をいただいている。	①社会に開かれた教育課程の実現に向け、これまでのパン販売等の実践に加えて、他の作業学習においても、より地域と連携し、自己肯定感を高められる授業を全職員で検討し、展開していく。 よこひな通信やホームページ、地域情報誌等を活用して、校内外における地域と連携した様々な活動や教職員研修の様子を広く発信していく。 地域防災拠点運営委員会や自治会の方々ともより密に連携し、防災教育のさらなる充実を図る。
			地域と連携した防災教育の充実と防災体制の強化を図る。	地域や消防署と連携し、体験的な教育活動(防災教育)や職員研修会を実施する。	地域や消防署と連携した防災教育を計画・実施することができたか。また、地域の防災訓練への参加や職員防災研修(消防署に協力依頼)を通じて、災害時の体制について職員の理解を深めることができたか。	下瀬谷消防出張所の協力のもと、1 学年の防災教育(煙体験・消火器体験)を実施した。事前に煙への対応を学習していたため、生徒から色々と質問が出た。 瀬谷区役所の協力のもと、職員 HUG 研修を実施した。避難者の受け入れについて、グループごとに考えながら進め、活発な意見交換がなされた。振り返りアンケートの自由記述に多くの感想が出ていた。	1年防災教育については、今年度と同様に、日頃の授業と連携して生徒の学習を深めるようにする。職員 HUG 研修実施後のアンケートでは、「災害時の対応についての理解が深まったか」の問いについて、「できた」41%「大体できた」で 56%、「あまりできなかった」3%との回答であった。学校と地域との確認内容について、今後も職員に確実に周知する。			
		センター的機能を発揮し、地域の支援教育の推進を図る。	②3年間を見通したインクルーシブ教育実践推進校(高校)への支援の在り方を探る。	②近隣のインクルーシブ教育実践推進校へ定期的な巡回訪問を行い、3年間を見通したニーズと支援内容を整理していく。他校の Co.とも連携し、情報収集を進め、参考資料の作成を行う。	②近隣のインクルーシブ教育実践推進校のニーズを整理し、それぞれに応じた支援の方策や情報を提供することができたか。 得られた情報を今後の支援の参考資料としてまとめることができたか。	②近隣高校に加え、2月にはインクルーシブ教育実践推進校への巡回訪問へ行く予定である。近隣学校での巡回相談に関することや高校へのアプローチの方策について、瀬谷区の県立特別支援学校3校で情報交換を行なうこともできた。	②近隣高校を含め、地域にさらに知ってもらうための仕組みづくり(HPの活用や会議の場を利用する等)を行う。インクルーシブ教育実践推進校や近隣高校との関係づくりを進めながら、引き続きニーズの収集と支援の方策の整理に取り組んでいく。		②近隣高校やインクルーシブ教育実践推進校への巡回に加え、瀬谷区の特別支援学校3校との情報交換も実施した。 ◆教育相談ケース数 137 回 (校内:114 回、校外:23 回) ◆巡回相談数 23 回 (高校1回、インクル校:1 回)	②ホームページや地域ブロック内の様々な会議を利用して、センター的機能の内容について近隣高校を含めた地域に広く発信し、ニーズの掘り起こしや顔の見える関係作りに努める。
5	学校管理・学校運営	安全な環境を整備し、生徒が安心して学ぶことができる学校づくりを推進する。	①時代や社会の流れを踏まえて、教職員の人権意識等を高めるための継続した取組を推進する。	①学校の課題やニーズ、社会情勢の変化を見極め、研修会の進め方を工夫する等して、人権意識を高める研修を実施し、アンケート等により効果を測定する。	①研修後のアンケートで、研修目的達成が8割以上になったか。また研修後の気づきを明確にできたか。	①7月人権研修、12 月生徒指導研修では、性教育をテーマに学びを深めた。ともに目的を達成できなかったと回答したのは1名(0.04%)であるが、「達成にまでは至っていない」という前向きな回答内容であった。	①生徒指導に活かせないと回答したのは2名(0.07%)であった。今後も共通のテーマ設定をしていくことも検討しながら、生徒指導に活かせる、もしくは教員の意識向上、改善に役立つ研修を考えていきたい。	**【アンケート】**(とても良い、だいたい良いの合計) **保護者 78.3%(16.3↗)** ・学校のホームページが少し物足りない感じがする。活動をもう少しアピールする内容になると見がいがある。 ・たくさんの教職員研修をしていることをもっとアピールするとよい。魅力的な目を引くタイトルで伝えられるとよい。 ・子ども一人ひとりが全く違う場面でそれぞれの支援を必要としている中、先生方の対応に今後も期待している。	①今年度は人権研修としての「性教育」をテーマに教職員研修を実施し、学びを深めた。 「生徒の人権に配慮した丁寧な指導」に関しては高い評価を得た一方、「高校生としての年齢相応の対応」を望む保護者の意見もいただいた。 ②生徒一人ひとりのニーズに応じた支援を行うために、10月より新たにICT支援員を加配するなど、教職員の業務軽減に努めている。 教職員が気軽に業務依頼ができるシステムの改善が、今後の課題である。	①教職員の人権意識をさらに高めるため、常にアンテナを高くして社会情勢の変化を捉え、ニーズに即した研修テーマを設定し、専門性の向上を図る。 多岐にわたる教職員研修の内容やその効果を、ホームページや学校だより等を活用して積極的に発信していく。 ②生徒としっかり向き合う時間を確保すると共に、事故防止の観点を重視し、校内外の物的・人的資源を活用しながら、業務の精選や効率化を図る。
		教職員が生徒と向き合う時間を確保し、効果的な教育活動を実現する。	②会議の設定や業務の進め方の改善を通して、教職員の働き方改革を推進する。	②会議設定の目的を明確にして効率化を図る。 業務アシスタントや学校業務サポーターの業務内容を整理し、教職員に周知することで、さらなる活用の促進を図る。	②会議の効率化や計画的な業務依頼により、教職員の時間外勤務が減少したか。	②業務アシスタントと校内業務サポーター、ICT支援員への依頼方法やそれぞれの業務内容を整理するために、業務依頼票を改訂し、教職員に周知した。	②業務依頼数や活用する職員の数も少しずつ増えてきている。活用のハードルを下げるべく、さらに具体的な業務内容を周知し、活用を促進していく。			